

小説着想の謎と思惑

長らく日経新聞朝刊に連載されていた浅田次郎氏の時代物「黒書院の六兵衛」が過日最終回を迎えた。初っ端から衝撃的な書き出しだった。その想像もつかない着想は言うに及ばず、意外な展開となったストーリーは巧みに武士たちの作法や心理を描いて興味が尽きなかった。江戸城明け渡し前後に西の丸御殿でやりあった公家と武家の鞘当と思惑、その火種を投じた主人公の超然としたパフォーマンスに、時代小説らしからぬエスプリを感じてしばしそのドラマにどっぷり浸かった。

得体の知れない「的矢六兵衛」なる一介の武士が、断りもなしに畏れ多くも西の丸御殿に上がりこみ、そのまま御殿に 40 日も居座り続けた「切腹」ものとも思える不敬罪に対して、幕閣らが気を遣い人情味という味つけでもてなす様をほのぼのと描いた時代劇の、けだし洒落な傑作と呼べるものではないかと思っている。だが、それにしても読み終えてどうにも腑に落ちない。

考えてみるに国を揺るがせたあの激動の真っ只中に、封建制度の本家本元の、また政治の中心だった江戸城御殿内で、あのような前代未聞のドラマが事実として本当にあり得ただろうか、と不思議な思いがしたのである。1年近い連載が終わったその日、どうにも合点が行かず「本当のところはどうだったのか。近いうちに作者の浅田次郎氏に会ったら尋ねてみよう」とブログに書き込んだ。

ところがまさにその翌日、思いがけずさる場所で浅田氏にばったり出会ったのである。意気込んで不躰にその点を浅田氏に尋ねてみた。「いや～、あれはウソ！ウソですよ！だって小説ですもの」と浅田氏の答えはにべもなくあっけらかんとしたものだ。それはそうだろうが何か・・・？

連載を終えた浅田氏は 10 日ほどして、日経文化欄にこう書いた。「的矢六兵衛はいづくより来たりて、いづくへと去るのか。彼はいったい何者であったのか。この不明の結末を、酒の肴や茶飲み話や、ネットの話題に載せていただければ幸いである。かくいう私も、このさきずっと考え続ける」。

さあ～皆さん、六兵衛は何者でいづくより来たりていづくへ消え去ったのだろうか？

(近藤節夫)